

# 平壤での青春

——愛知朝鮮高級学校〈祖国訪問〉同行調査記 そのいち——

山 本 かほり\*

## 1. はじめに——朝鮮高校の〈祖国訪問〉同行記をはじめにあって

本稿は愛知朝鮮中高級学校<sup>1)</sup>高級部（愛知朝高）3年生の〈祖国訪問〉への同行調査の記録である。

朝鮮高級学校（朝高）の3年生は、修学旅行（＝〈祖国訪問〉）として〈祖国〉を訪問する。その〈祖国〉とは朝鮮民主主義人民共和国（朝鮮）である。時期は高3の5月～7月、および9月、期間は2週間である。愛知朝高は例年5月末から6月初旬にかけて行く。九州朝高（北九州市）と同時期のことが多い。

ところで、なぜ、朝高は〈祖国訪問〉として朝鮮に行くのだろうか。まずは、朝鮮学校の政治的な立場を説明しておく必要があるだろう。

朝鮮学校は、朝鮮半島にある南北2つの分断国家のうち、北側の朝鮮を正当な国家としてみなす。その理由は、二つの国家の成立過程に鑑みて北側に正当性があると考えていること、そして、1957年から現在にいたるまで続く朝鮮からの朝鮮学校支援金＝「教育援助費・奨学金」にある。朝鮮は60年以上、164回にわたって、総額約481億円の支援金を送ってきた（『朝鮮新報』2017年4月19日）。これらのお金が、日本政府からは何の補助もない朝鮮学校にとって、大きな助けになってきたのである。このことは「感謝の物語」として、朝鮮学校内では語り継がれている。ちなみに、分断国家のもう一方、韓国は、これまで朝鮮学校に国家的な支援をしたことはない。韓国が「在日朝鮮人のことは日本にまかせる」としてきたことも、朝鮮学校が北側の正当性を主張する根拠の一部である。

しかしながら、朝鮮学校と朝鮮の関係は、このような歴史または象徴としてだけのものではない。朝鮮学

校で参与観察を行っている、その両者の関係が現在でも実態的かつ日常的なものであることがわかってくる。その一つの事例が、本稿で扱う高級部（日本の高校相当）3年生の〈祖国訪問〉（修学旅行）である。そのほかにも、毎年末から年始にかけての「ソルマジ」（迎春）公演への参加、希望者による平壤舞踊音楽大学通信教育受講、全国朝高2年生の代表学生たちの訪問、朝鮮学校初級部のサッカー、バスケットボールなど全国大会優勝校の訪問等々、朝鮮学校の学生たちが朝鮮を訪問する機会は多い。さらには、総聯機関紙『朝鮮新報』記者が平壤駐在をしていたり、朝鮮大学校（朝大）の研究院生（大学院相当）や朝大教員が研究で長期滞在をしている。また、朝鮮学校教員、総聯が持つ芸術団の団員、総聯職員などの講習も行われている。また、一般の在日本朝鮮人の短期訪問も年に何回か行われている。

また「朝鮮に行ったことは1度だけ」とか「もう何十年も行っていない」という一般の朝鮮学校保護者たちの多くも、朝鮮に対しては特別な感情を示す。それは、「（同じ朝鮮半島でも）韓国へ行くのは旅行気分よね。でも、ウリナラ（朝鮮）っていうと、ちがうのよね。ちょっと背筋が伸びるような感じ」（1960年生・女性）とか「（国籍は）韓国だけど、韓国には行ったことはない。それは、私のこだわりで行かないの。ウリナラ（＝朝鮮）には一度だけ、まだ20代の頃に行きました。はい、今でも特別ですね。愛国歌（国家）を聞くと、姿勢を正しますよ」（1962年生・女性）などという語りからうかがい知ることができるであろう。

このように、朝鮮学校関係者にとって、朝鮮はとても身近な存在である。かれらは朝鮮のことを「ウリナ

ラ」(＝私たちの国)と愛着をこめて呼ぶ。しかし、参与観察を開始した頃の私には、こうした朝鮮に対する愛着をなかなか理解することができなかった。なぜならば、朝鮮は日本社会では徹底的に「他者化」された存在であり、そのため私は実に貧困な朝鮮のイメージしか持ち合わせていなかったからだ。したがって、朝鮮学校関係者たちの朝鮮に対する愛着を理解することが非常に困難だったのだ。「なぜ、あの朝鮮を『祖国』だと思うのだろうか？」と疑問に思っていた。

また、同時に、これまで研究で出会ってきた多くの在日朝鮮人たちの「(日本も外国だが)韓国も外国だと感じた」という訪韓時の経験談とも対比させて考えた。そして、その韓国での経験は私にとっても想像しやすく、また理解もしやすかった。なぜならば、在日朝鮮人であっても、日本での生活が3世代目、4世代目にもなれば、韓国が「外国」だと感じることは当然のことに思えるからだ。

一方で、訪朝体験をもって、朝鮮学校関係者は、朝鮮を「ウリナラ」と愛着をこめて呼び、さらに〈祖国〉だと言う。そのことは、当初、私には困惑をもたらした。今から思えば、私自身、それだけ、日本社会に流れる一面的な朝鮮イメージを内面化していたのであろう。そして、朝鮮学校を理解するためには、朝鮮学校と朝鮮との関係を正面から考えてみる必要があると考えるようになった。

そこで、まずは、この問いの答えを追究するために、愛知朝高3年生の〈祖国訪問〉に2013年～2018年まで計6回の同行調査を行った。本稿では、まずは、当事者たちの経験をベースにしつつ、エスノグラフィ的に朝高生たちと過ごした朝鮮での日々を描いてみたいと考えている。

## 2. 朝鮮高校の〈祖国訪問〉を描いたもの——先行研究検討に代わって

朝高の〈祖国訪問〉に関する先行研究は存在しない。しかしながら、映像には残され、公開されたものがある。

まずは、〈祖国訪問〉部分だけ、当事者に撮影してもらい、その映像をドキュメンタリー作品の中に挿入するという方法を取ったもの。私が知る限りで3本ある。

そのうちの一つは、愛知朝高を撮ったものとして、『ウリナラ内なる祖国 愛知朝鮮中高級学校寄宿舎の1年』(メーテレ制作, 2005年4月12日放送)がある。

ちょうど、韓流ブームが席卷中で、サッカーW杯の日韓同時開催などの直後、しかし、同時に小泉純一郎首相(当時)が訪朝し、そこで明らかになった「拉致問題」のため、「北朝鮮」をバッシングする報道が一日中テレビ等で流されていた頃の取材である。愛知朝高の寄宿舎生活の1年を撮り、その中に〈祖国訪問〉に万景峰号<sup>2)</sup>で出発する愛知朝高生たちが映る。テレビ局には同行取材に許可がおりず、カメラは引率の愛知朝高教員に託され、朝鮮での朝高生たちの姿が映し出される。

また、『ウリハッキョ』(金明俊, 2005)は韓国人の監督が北海道の朝鮮学校に何年か泊まり込み、朝鮮学校の様子を映し出したドキュメンタリー映画である。この映画にも、高3が万景峰号で朝鮮に向かうシーンがある。監督が「それまで子どもたちと南北分断の影を感じたことはなかったが、船が出て行くのをみながら、初めて、分断を実感した」(要約)と語るシーンがこの映画の一つの見所だ。そして、やはり、カメラは朝高生たちの手に渡り、かれらが撮った朝鮮でのシーンが映画の中に組み込まれる。そして、日本に戻った朝高生たちのことを監督が「今までと少し違ってみえる」と評する。そして、いつまでも朝鮮での思い出にひたる学生たちの姿が映る。

さらには、映画『60万回のトライ』(朴思柔・朴敦史監督, 2013)をあげることができる。この映画は大阪朝鮮高級学校のラグビー部を撮ったものであるが、ここにも〈祖国訪問〉の様子が映し出される。韓国人の監督と在日朝鮮人の監督の作品であるが、やはり、カメラは学生や教員に託され、朝鮮での朝高生たちの様子が映し出される。

いずれも生き生きと朝鮮で楽しく学んでいる朝高生たちの姿を見る者を魅了するが、さらに一步すすめて、朝高生たちに同行して朝鮮での姿を追ったドキュメンタリー映画がある。在日朝鮮人で、自身も朝鮮学校での教育を朝鮮大学校まで受けた朴英二監督の作品である。タイトルは『蒼(そらいろ)のシンフォニー』(2016)で、茨城朝鮮高級学校の高3が朝鮮で過ごす姿がスクリーンに映る。朴英二監督は、映画作成に際して、「何を入れ、何を省くか、何を説明するか/しないかの選択が難しかった」と語っていた(2018年8月20日インタビュー)。日本社会に向けてのドキュメンタリーという位置づけだったので、とにかく、「僕が知っている祖国の姿を知らせたい」という動機だったという。「朝高生たちにとって『祖国』とは何だろ



写真1 万寿台の抗日革命闘争記念碑でポーズをとる  
愛知朝高生（愛知朝高提供）



写真2 主体思想塔で（愛知朝高提供）

うか？」という問いを観客に投げかけているが、その答えは言葉では明確には示されない。しかし、朝鮮の人びと、朝鮮の自然、土地に出会い、実に楽しそうに、そして、真剣に〈祖国〉＝朝鮮と出会い、向き合う朝高生の姿は、朝鮮や朝鮮学校を知らない観客には新鮮な印象をもたらす作品であろう。

これらの作品は、韓国人および在日朝鮮人監督の作品であり、私自身は日本人研究者としての立場から、朝鮮学校生にとって〈祖国〉や〈祖国訪問〉がもつ意味を考察したいと考えている。

早急に理論的な枠組みにいれることなく、まずは、エスノグラフィックな記述をしていきたい。以下、本稿では、本格的な調査が実行できるようになるまでの経緯を記すことにしたい。

### 3. 〈祖国訪問〉同行まで——問題意識

日本人である私が愛知朝高の〈祖国訪問〉に同行するようになったのか、その経緯と方法について述べておきたい。

昨今、朝鮮学校をめぐる議論が侃々諤々行われている。朝鮮学校を批判する立場の主張は、朝鮮学校と総聯・朝鮮との関係を強く問題視し、学校で行われている教育は、朝鮮を過度に「崇拜」する「洗脳教育」だと主張する。一方、朝鮮学校を擁護しようとする側は、「朝鮮学校は以前のように『北朝鮮』一色の教育ではない」「『北朝鮮』との関係は薄まってきている」「日本の学校と何も変わらない教育である」等、朝鮮

学校が日本社会にとっても「理解しやすい」ものであり、日本社会にもなじむものであることを強調する。

私自身も後者の言説に後押しされるようにして、朝鮮学校でのフィールドワークを始めたひとりである。つまり、このような言説が、朝鮮学校研究を開始するにあたっての「タブー感」のようなものを、緩和してくれたのである。

しかしながら、朝鮮学校に出入りしているうちに、上述のような言説に違和感を感じるようになった。朝鮮学校の立場は厳然と朝鮮の正当性を主張するものである。また、日常的な学校生活でも、特に高校では朝鮮との結びつきを示すものが多々ある。それは、各教室に飾られている金日成、金正日の肖像画にはじまり、学生たちが朝鮮の祝日にあわせて作成する「壁新聞」にも、ごく自然に朝鮮の指導者のことが書かれる。ひょっとしたら学生たちにとっては、「当たり前」に使用している言葉だけに、大した意味をもたないかもしれないほど「自然」で、その内容も朝鮮との心理的距離の近さを表現するものだ。さらに、学校の公式行事における挨拶でも必ずと言っていいほど、現在の朝鮮の様子が肯定的に言及される。

フィールドワークを開始して間もない頃、私は、これらの「事実」に戸惑いを感じた。日本社会で形成された朝鮮のイメージから自由になれず、「ここにいってもいいのだろうか」という居心地の悪さを感じ続けた。もちろん、理屈の上では「朝鮮と朝鮮学校の関係は、朝鮮学校の当然の権利である」と認識していた



が、その理屈ではおさまりきれない違和感、もっと言えば拒否感を感じていた。

しかし、同時に、これらの事実を前にして、簡単に朝鮮学校と朝鮮の関係を「無」にして、朝鮮学校を論じることにはできないと考えるようになった。朝鮮学校関係者にとって、「祖国（＝朝鮮）」の意味を考えなければ、朝鮮学校を描くことはできないと考えるようになったのである。

さらには、先にも述べたが、公的な場面以外でも朝鮮学校の学生たちが朝鮮に対して「憧れ」や「愛着」を語る。「ウリナラ（＝朝鮮）に行けていいなあ」「ウリナラに行ってみよう」「ウリナラにまた行きたい」などという声を頻りに耳にするのである。

また、本稿の中心的な主題である〈祖国訪問〉後の朝高3年生たちの姿にもある種の「戸惑い」を覚えた。学生たちは一様に「楽しかった」「また行きたい」と口にし、私に朝鮮の良さを伝えようとした。しかしながら、私にはどうしても理解できなかった。どれだけ言葉を尽くして学生たちが私に語っても、私自身、日本社会に流れる否定的な朝鮮像から自由になれなかったのだ。

「行かなければわかりませんよ。」

当時、朝鮮大学校1年生だった愛知朝高出身の男子学生にこう言われた。それが「朝鮮へ行ってみよう」と思うきっかけになった。彼は私に「ウリナラ行ったら体験のことを聞かれて、いっつも言うんですけど、伝わんないと思うんですけど。違うんです。着いた瞬間、わかるんです。空気が違う。ここが祖国だってわかる、感じる。あっちの人たちの対応だったり、空気っていうか。ホント、特別。あれは行かなきゃわかんない」と語った。

「なぜ、彼は生まれ育ったところでもない朝鮮を『祖国』だと言うのだろうか？ それは、単に学校教育の成果なのか？ または、〈祖国訪問〉のプログラムによって、『舞い上がった』だけなのだろうか？ それとも、私自身、平壤に行くことによって、かれらとのこの距離をうめることができるのだろうか？」

こんな問いが、彼にインタビューをしている時に浮かんだのである。そして、「朝鮮へ行ってみよう。できるならば、朝高生と一緒に平壤に行き、同じ時間を過ごしてみたい」と思ったのである。

早速、当時の校長や対外担当の教員にその希望を伝えた。しかしながら、答えは「難しい」だった。それ

は、朝鮮の海外同胞や外国人の受け入れの仕方に起因する。まず、外国人であれ、海外同胞であれ、朝鮮ではいわゆる「自由旅行」はできない。訪問目的にそって、受け入れ機関が決まる。日本人の私と海外同胞である朝鮮学校生とは、訪問目的も異なるし、当然、受け入れ機関も異なるからだという。したがって、朝鮮学校の受け入れ機関（海外同胞局＝海同局）が、日本人である私を受け入れることはできないという。だから、朝鮮学校生と一緒に訪朝するのは簡単なことではないと説明された。

しかしながら、私はあきらめがつかなかった。朝鮮社会のあり方を全く知らなかったので言い続けることができたかもしれないと今になると思うが、何度も朝高の校長や総聯愛知県本部の職員に希望を伝えた。「日本では朝高生と過ごすことができるのに、なぜ朝鮮ではできないのですか？」と。最初の頃は、難しい顔をして「ウーン」としか言わなかった校長が、ついに次の様にアドバイスをくれた。

「初訪朝で私たちに同行するのは無理だ。まずは、日本人の受入機関である朝鮮対外文化連絡協会（対文協）と信頼関係を作りなさい。機会をみつけて、朝鮮へ行ったら、まずは、山本さんがどんな人間かをみてもらうことから始めたらいい。そして、信頼関係を作ったら、朝高に同行したいという希望を理解してもらいなさい。」

それを聞いたときには「朝鮮に行くなんてどうしたら可能になるのだろうか？」と途方にくれたが、意外に簡単にその機会を訪れた。私の強い希望をくみ取って、総聯愛知県本部の方が訪朝の機会を作ってくれたのだ。2011年10月17日～22日、経由地の北京1泊、平壤4泊（実質は3日間）という短い訪問だったが、朝鮮を訪問することができた。同行してくれた総聯職員は「何も構えなくていい。いつもの山本さんを、（受け入れの）対文協にみてもらえばいい」とアドバイスしてくれた。私は大きな期待と緊張をもって平壤に入ったことを覚えている。

初訪朝のことは、拙稿（山本・小笠原・伊藤，2013）に書いたが、強く印象に残る訪問となった。対文協の案内員の孫哲秀副局長（当時）と金成泰さん（彼はのちに私の担当案内員となり、もっとも気心がしれた朝鮮の人となる）についてもらい、平壤市内を中心に参観をしたり、現地の人との交流をした。いわば、平壤の「初心者コース」のようなものだった。「朝鮮でどう振る舞えばいいのだろうか？」という心配はすぐに消

え、3日間、十分に楽しみ、また、対文協との人間関係を作るという目的もある程度は達成できた。

孫副局長は「また是非きてください。お互いに連絡をとりましょう」と言ってくれ、メールアドレスなど連絡先を教えてくれた。この時点では、メールで朝鮮と連絡を取り合うことがどこまで可能なのかなと半信半疑ではあったことも事実である。しかし、日本に戻って、訪朝期間のお礼メールをすると返事がきて、その後も季節の挨拶程度のメールは交わすようになった。

### 3-2：2回目、3回目の訪朝

2回目の訪朝は、愛知朝高の〈祖国訪問〉期間に合わせていくことにした。しかし、準備を内々にすすめていたのに、2012年4月になり、愛知朝高に人事異動があり、私の同行を理解してくれていた校長と対外部長が、他の学校等に異動することがわかった。新任の校長も以前から顔見知りではあるが、私の〈祖国訪問〉同行希望については全く知らない。前任の校長にも引継をお願いし、私もあらためて挨拶に行き、希望を伝えた。新任校長の「そんなこと、できるかな？」という表情に不安な気持ちになったが、彼とも信頼関係を作るしかないと気持ちを切り替えた。

また、2回目では訪朝も一人ではできず、知人友人を誘って3人で2012年6月16日～21日に訪問することにした。愛知朝高〈祖国訪問〉の後半1週間に同行するということだ。対文協にメールでちょうど愛知朝高の訪問期間にあたるので、なるべく合流させてほしい旨を希望した。また、総聯愛知県本部の委員長（当時）が対文協の副委員長（当時）あてに手紙を書いてくれ、私の希望を伝えてくれた。

しかしながら、やはり、2回目の訪朝ではすんなりとはいかない。到着した日の日程打ち合わせでは、たった一つ、愛知朝高が姉妹校を訪問するプログラムだけが同行となっていた。それでも、まだ、強く要請できるような関係でもなく、「山本先生だけ、あとで平壤ホテル（愛知朝高の宿泊ホテル）に行って、校長先生と愛知の責任指導員（海同局の職員）に挨拶をしましょう」と言われたことに望みをつないだ。

夜8時頃、宿泊していた高麗ホテルから平壤ホテルに対文協の成泰さんと車で向かった。わずか5分ほどの距離だ。ロビーで待っていると、愛知朝高の学生たちがいて、私をみて、飛びついてきてくれた。そんな姿をみて、成泰さんは「愛知の子どもたちが山本先生

を慕っているのがわかった。山本先生の希望をもっと叶えてもいいかなと思った」と後で教えてくれた。朝高生たちに感謝だ！

その後、愛知朝高校長と責任指導員に挨拶。愛知朝高の日程を見せてもらい、どこか合流可能なところはないかと成泰さんに交渉した。結果、「朝鮮革命歴史博物館」と「駅前食堂（平壤駅前にある日本の料理が食べることができる）での夕食会」が可能だと回答された。もちろん、元から入っていた姉妹校訪問はそのまま残った。本当はもう少し一緒に行きたいプログラムがあったが、「難しい」と言われて諦めた。何よりも、責任指導員の「冷たい」雰囲気になんか踏み込む勇氣はでなかった。その時は、事前に対文協と海同局との事前調整はほとんどなかったようだし、これ以上自分の要求を通そうとすることはよくないと考えた。ということで、2回目の訪朝も、朝高生の観察よりも、私自身を対文協にもっと知ってもらう時間ということで割り切った。2回目は桂成訓さんと成泰さんの二人の案内員とともに現地5泊6日の日程をこなした。毎晩、夕食後に一緒にお酒を飲みながらたくさんのお話をしたことで、私がやりたいと思っていることも伝わったようだった。しかし、二人は相変わらず「難しい」と言い続けた。「愛知朝高のメンバーとして来たらどうですか？」というのが対文協からの提案だったが、それはそれで難しいことがわかっていたので、曖昧な返事でその場をしのぐしかなかった。日本人で単なる研究者および愛知中高の支援者的な立場の私が、愛知朝高の〈祖国訪問団〉のメンバーとして訪朝できるわけがないのだ。日本人と在日朝鮮人では現地にかかる費用も異なる。待遇も異なる。そんなに簡単に朝高訪問団に加われるはずがないと思った。

いずれにしろ、2回目の訪朝時は、2ヶ月後の8月末に再訪することが決まっていたので、その旨を話し、またゆっくり相談したいとお願いするだけにした。成泰さんからは「山本先生の日本での朝鮮学校支援活動<sup>3)</sup>について知りたいので、可能ならば、資料をメールで送ってくれたらありがたい」と言われた。海同局の担当者に私がどんな人間かを話すのに役にたつということだったので、再度、そこに望みをつないで、2回目の訪朝を終えた。

3回目の訪朝は、2012年8月25日～30日で、「日本の大学生・教員のための朝鮮ツアー」の一員としての訪問だった。これは、日本の大学等に通う在日朝鮮人学生の団体である在日本朝鮮留学生同盟（留学同）が

主催するツアーだ。留学同の結成は1945年。73年という長い歴史をもつ団体だ。その留学同が主催して、マイナスのイメージばかりが先行する朝鮮の姿を日本の大学生や教員に実際に見て感じてもらうという目的のもとに行っているツアーである。2012年は数年ぶりのツアー実施だったが、その後、2018年まで毎年行われている。

この時の対文協の案内員は、6月にも担当してくれた桂さんと平壤外国語大学で日本語を専攻する金笑美さんという女性だった。笑美さんは、日本語実習として大学から派遣された。(平壤の大学生と会うのは初めてだったが、物怖じしない性格の彼女とは色々な話しをした思い出が残っている。)

3回目は、夕食までは訪朝団のメンバーと一緒に過ごしたが、一日の日程が終わると、桂さんに誘われて、毎晩お酒をともにし、夜遅くまでたくさんのお話をした。たとえば、日本の「北朝鮮」への眼差しについて、そこから発生する朝鮮学校生への差別について、そして、すでに「解決」は法廷に持ち込むしかない状態になっていた朝鮮高校の無償化排除問題など、もちろん、冗談がうまい桂さんにのせられて、私もずいぶん気楽に冗談を言って笑った。

4日目の夜だった。桂さんが「先生、愛知朝高と一緒に来たいんですか？」と言い始めた。私は、チャンスだと思い、「朝高生にとって『祖国』とはどんな意味を持つのかを考えたい。日本では悪くしか言われない朝鮮をなぜ『祖国』だと考えるのか、朝高生と一緒に過ごしながら考えたい」と熱く語った。

それを聞いていた桂さんの答えは以下のようなものだった。

「先生の気持ちはわかりました。でも、何度も言っているように、本当は日本人と在日朝鮮人が一緒に行動するのは面倒なんです。でも、なんとかやってみましょう。次回は、愛知朝高に合わせて、先生、一人で来て下さい。こちらのことは対文協が解決します。ただ、朝鮮学校、総聯愛知県本部には、もう一度よく話して下さい。その上で総聯中央からその希望を明確に書いて、こちらに送ってきてください。つまり、総聯中央の理解もちゃんと得てくださいということです。書類は遅くとも一ヶ月前までに欲しい。でも、早ければ早い方がいいです。それと、一人だと乗用車を用意することになりますし、対文協からも二人つきますので、費用はかかりますがいいですね？」

私は、研究費での渡航になるだろうこと、そのため

にはいくつかの書類が必要になるだろうことを説明し、その後、桂さんから「詳細は、お互いにメールで連絡を取りながら進めていこう」という返事をもらい、まずは、第一関門クリアとなったのである。

ところで、1回目～3回目の訪朝には、研究遂行のための準備という目的もあったが、同時に私自身の朝鮮観を根底から見つめ直す貴重な機会となった。もちろん、違和感や「拒否感」のようなものがなかったわけではない。いや、あった。しかしながら、そうしたことから、私自身が日本社会で暮らしているうちに、いかに、「北朝鮮」に対する嫌悪感情(板垣, 2013)を毛穴にまでしみいるようにしてもっているのかということに気づかされたという点においても大きな意味をもつ訪問だった。

### 3-3：2013年6月の同行調査まで

上記のような経緯を経て、本格的な〈祖国訪問〉に向けて準備を開始したのは2013年3月上旬だった。愛知朝高および総聯愛知県本部には何度も話しをし、協力を依頼していた。事務的な手続きについては総聯愛知県本部に任せ、私は実質的な依頼を対文協にしかじめた。今でも記録に残っているが、当時対文協から来た返事には、「先生が、今回の訪問を通じて、祖国の現実の中で、朝鮮人としての矜持と自負心が何かを体得していく朝鮮学校学生の様子を直に見て、かれらとの関係を深めることができるきっかけになるように積極的に努力いたします」(2013年4月上旬メール)とある。

しかし、これらのメールに喜んでいたのもつかの間。思いがけないところから「保留」がかかった。大学からだった。

訪朝についてはナイーブな問題が含まれていたもので、初訪朝の前から種々関係者には相談をして、実施してきた。すでに4回目だったために、少し気楽にそれでも通常の海外渡航よりは慎重に事をすすめてきていたつもりだったのだが、この年の朝鮮半島情勢を理由として、大学側から「保留」がかかったのだ。

確かに、連日報道される南北間の緊張を見れば、その心配も理解できないわけではない。しかしながら、毎年3月～4月にかけて実施されている「米韓軍事合同演習」に対して、朝鮮側から激しい反発がされるのは毎年のこと。確かに、2013年は報道からは、南北がひどく緊張しているように思われた。しかしながら、朝高側は「例年通り実施の予定」と言うし、ま



た、様々な方面からの情報を総合すると、「戦争」状態にはならないと信じていた。率直なところ、大学側からのペンディングには納得がいかなかったが、最悪「有給休暇ならば止めることはできない」という回答に、「行くことはできる」と自分を慰めた。(結局、5月半ばになって、大学からも承認された。)

日本の報道からのみ判断している大学側にかなりいらだっていたことも事実だ。信頼できる同僚に相談し、教授会で、「学問の自由にも反する」という意見表明をしたことも今となっては懐かしい。ただ、私の所属する教授会の「名誉」のために付言すれば、当時の学部長は、私の渡航を「応援」してくれ、教授会も渡航を承認した。今は、私の研究について何も言わない大学に感謝している。

また、ほぼ同時期に、総聯を通じての手続きも少々難航した。「日本人の大学教員が朝高生の〈祖国訪問〉に同行したがっている」ということを聞いて、私のことを知らない総聯中央の人たちが不信に思うのはごく自然なことだ。まさにそれが起こってしまった。そこで総聯愛知県本部の人たちにはずいぶん尽力してもらい、最終的な承諾が出たのは、5月も下旬になっていた。滞在日程も、二転三転したが、講義や学会の関係上、愛知朝高よりも5日遅れで平壤入りし、平壤を出るのは愛知朝高が出た2日後、合計11泊12日の朝鮮滞在とすることで決着がついた。詳細は省略するが、当時の記録をみると、私自身、相当ハラハラ、イライラしながら、準備をすすめていたことが頭によみがえる。

同時に、対文協側も私が愛知朝高の訪問団と同行することについて、海同局との交渉に苦労していたようだ。「校長先生に平壤に着いたら、受入機関に先生(=私)のことをきちんと話し、私の希望を校長先生からも伝えてほしい」というメールが朝高の出発直前に届いた。私自身、学校に向いて再度お願いをし、また、朝高出発の朝は空港まで見送りに行き、再度、校長にお願いしたことが懐かしく思い出される。

空港では朝高の先生や学生たちが「かほり先生、平壤で待っていますからね!」と言ってくれ、「やっぱり一緒に出ればよかったな」と後悔もしたけれど、「すぐに追いつきますから!」と見送った。

それにしても、かかる費用も日程も「行ってみないとわからない」という状況。得られた情報から判断して、ある程度のお金を用意し(朝鮮ではすべて現金で払うしかない)、着替えもスーツから防寒着(白

頭山——朝鮮で最も高い山——に行けるかもしれないという期待をこめて)まで準備した。そして、朝高生に遅れて4日後、まずは、経由地の北京に向けて飛び立った。

#### 4. 2013年の同行調査(1)

2013年6月11日、いよいよ4回目の平壤入りとなった。平壤の空港で迎えてくれたのは、もうすっかりなじみとなった成泰さんと初めて案内となった金春実さん。対文協唯一の女性案内員である。車は黒のベンツが用意され、ひとなつこい顔の運転手さんが私を歓迎してくれた。

車内で早速実務的な会話がはじまった。まずは宿所の問題だった。私自身は、朝高生と同じ平壤ホテルでの宿泊を希望していたが、「満室」で宿泊できないという。対文協の提案は、近くの「解放山ホテル」だったが、設備のことを考えて、また、2回目の訪朝でも泊まったことがあるという安心感から、高麗ホテルに泊まることにした。高麗ホテルは、朝鮮ではトップクラスの国際ホテル(外国人用ホテル)で、一泊100ユーロもするが、2013年当時は円高で予算内で十分に泊まることができた。平壤駅のすぐ近くにあり、平壤の市内中心部に位置するホテルで便利だし、朝高生たちが宿泊している平壤ホテルも徒歩20分程度の距離にあった。予約の変更もすぐにできた。

宿泊ホテルの問題はすぐに解決したが、私の心配は日程がどうなっているかである。はじめての同行調査であり、対文協と海同局の連携がどこまで可能だったのか、とても心配だった。ホテルにチェックイン後の「日程打ち合わせ」を待つしかない。

私たちを乗せた車は、空港を出て30分弱で高麗ホテルについた。チェックインをすませて、荷物をおき、すぐに3Fにあるコーヒーショップで日程打ち合わせを行った。成泰さんが、日程(表1参照)を提示し、説明してくれた。

「これが日程表です。先生がすでに行ったことある場所もたくさんありますが、朝高生と一緒にいくことで、また違う意味があると思い、そのまま残しました。白頭山も行けます。板門店も一緒に行きましょう。先生が行きたいと言っていた妙香山は残念ながら、今日、行ったようです。下線部は朝高生と別れて、先生が一人で訪問する場所です。行けない場所は、軍関係の施設です。そこはどうしても行くことができませんので。これでいかがでしょうか?」

表1 日程表 (2013年)

日付	曜日	午前	午後	夜
6月11日	火曜日		到着	日程協議 朝高へ挨拶
6月12日	水曜日	8時 万寿台銅像挨拶 10時 信川博物館	15時半 朝鮮美術博物館	18時半 対文協同席食事会
6月13日	木曜日	10時 平壤民俗公園	14時半 テコンドー聖地 16時 万景台学生少年宮殿	休息
6月14日	金曜日	9時白頭山へ出発	白頭山史蹟地 密営地	休息 (白頭山泊)
6月15日	土曜日	鯉明水訪問	三池淵記念碑	平壤へ
6月16日	日曜日	統一通り運動センター	15時ルンライルカ館	対文協副局長と食事
6月17日	月曜日	8時 板門店へ	高麗博物館 王建王鎮	平壤へ
6月18日	火曜日	10時 金策工業大学電子図書館 11時 ハナ音楽情報センター	15時 平壤産院乳腺腫瘍研究所 17時 サーカス観覧	休息
6月19日	水曜日	彰徳学校 (姉妹校) 訪問	彰徳学校	平壤ホテルにて歓送会
6月20日	木曜日	愛知朝高見送り (ホテルにて) 国家贈物館	主体思想塔 党創建記念塔	対文協へのお礼食事
6月21日	金曜日	党創建事跡館	市内遊覧	休息
6月22日	土曜日	平壤発		

私は、初回の同行調査としては十分だと思い、すぐに承諾した。はじめから、軍関係の施設 (朝高生は若い軍人たちと交流会をする) の訪問は不可能だと聞いていたし、なによりも白頭山に朝高生と一緒にに行けることがとてもうれしかった。車代・参観代も予算内だった (高額ではある) ので、気持ちも楽になった。対文協に「今日の夕食は、このホテル内で先生が一人でとってください。20時頃を目処に部屋に電話をしますので、平壤ホテルに挨拶に行きましょう」と言われ、その場はいったん解散となった。

日程をみて、ホッとしたのと、うれしいのとで、部屋に戻り、思わずガッツポーズをした。機嫌よく、ホテル内の食堂で夕食をとり、部屋で対文協からの電話を待った。「早く、朝高生に会いたい!」と思っていた。約束通り、20時頃、電話があり、ロビーへ。春実さんが「朝高が待っているそうです。早く行きましょう」と言い、成泰さんと車に乗り込み、平壤ホテルに向かった。

5分もかからず、車は平壤ホテルに。車を降りると、愛知朝高の呉校長と朝青<sup>4)</sup>の責任者の鄭先生が迎えてくれた。一緒の時期に祖国訪問中だった神奈川朝高の校長も私を迎えてくれた。

鄭先生に「遠いところ、ようこそいらっしゃいました。さあ、早く、中に入りましょう」と促されて、一

歩中にはいると、朝高生の「ハナ、トゥル、セツ、ネッ」(1、2、3、4!)という声が聞こえ、「パーンガップスムニダ、パンガップスムニダ」(会えてうれしいです)という歌声と、かれらのアーチが私を迎えてくれた。

歌は朝鮮の歌の定番『パンガップスムニダ (반갑습니다)』(お会いできてうれしいです)だ。朝鮮では、交流会などの最初にこの歌を歌って、歓迎の意を表する。

学生たちの大歓迎にうれしさと気恥ずかしさが混じった気持ちで、アーチをくぐった。そして、学生の委員長「平壤に来た山本かほり先生を熱烈に歓迎します!」という言葉と大拍手に、「この子たちと明日から朝鮮で過ごすことができるんだ」という実感をもった。この時の動画を1年後にもらったが、それは私の宝物となっている。また、成泰さんも、今でもこのときのことを「あれは驚いたし、今回、先生に同行してもらうために、ちょっと苦労してよかった」と回想する。

この後、呉校長と朝高側の責任指導員 (金成革さん) にあらためて挨拶をし、ビールを飲みながら、再度、日程のすり合わせを行った。成泰さんいわく、責任指導員の成革さんのオモニ (お母さん) は、以前、対文協の職員だったため、私の要望に理解を示してく





写真3 信川博物館にて 神妙な表情で説明を聞く  
愛知朝高生（筆者撮影）

れ、思ったよりは交渉がスムーズだったという。しかしながら、海同局は、全くと言っていいほど私のことを知らない。したがって、愛知朝高が到着したとたんに、呉校長に「山本かほりという人物を知っているか？ いったい、どんな人なんだ？」と質問したという。呉校長も私のことを、朝高の熱心な支援者だと説明してくれ、協力を依頼してくれたと聞いた。朝高、総聯、対文協、海同局、この4者の理解と協力がなければ、絶対に実現しない同行調査だったのである。

この日の夜は、翌日からの日程に備えて、1時間程度で平壤ホテルを出て、高麗ホテルに戻った。翌日の日程は、早速少し遠出、信川博物館<sup>5)</sup>の予定だ。出発も早いし、疲れているだろうから早めに休もうと思いつつ、日本人のジャーナリストの案内でやはり高麗ホテルに宿泊していた桂さんと再会。成泰さんもまじえて3人で遅くまでお酒を飲みながら、再会を喜んだ。

この後、本格的にはじまる同行記は、次号に続けたい。

## 注

\* 愛知県立大学教育福祉学部教授

- 1) 朝鮮学校は、1945年8月15日の日本の敗戦後、つまりは朝鮮半島の解放後に、日本各地でできた「国語(=朝鮮語)講習所」に起源をもつ在日朝鮮人のための学校である。幼稚園から大学校まで体系的な民族教育機関として整備されており、現在は、60校あまりが日本全国に設置されている。愛知県内には5校の朝鮮学校があり、愛知朝鮮中高級学校は中等教育を実施している。学生数は2018年現在約190名で、中級部3年間、高級部3年間の教育を行っている。なお、高級部の学区は愛知、岐阜、三重、静岡、長野、福井などで、遠方の学生のためには寄宿舎が完備されている。

- 2) 2006年までは新潟と朝鮮の元山港を往来する万景峰号という船があった。多くの在日朝鮮人が往来していたというが、2006年、日本政府は「北朝鮮制裁」の一環として、入国を禁止した。以来、朝鮮には、空路で中国(北京、瀋陽等)を経由して平壤入りするしかなくなっている。
- 3) 朝鮮高級学校(全国に10校)は、2010年4月から開始されたいわゆる「高校無償化制度」から排除されている。そのことを不当として、5校の朝鮮高級学校で民事裁判が行われている。その支援に私が関わっていることを示す。
- 4) 朝鮮青年同盟の略。朝高では「生徒会」的な役割をもつ。
- 5) 黄海南道信川郡信川邑にある博物館。朝鮮戦争中の1950年10月17日から12月7日までアメリカ軍がこの地を占領し、住民の1/4を虐殺したという事件の遺物、証拠資料を展示した博物館。事件の詳細については諸説ある。ピカソの「朝鮮の虐殺」はこの事件を題材に描かれた。

## 参考文献

- 板垣竜太, 2007「朝鮮学校を支えるということ」『法学セミナー』2007年7月号
- , 2008「朝鮮学校の社会学」(同志社大学社会学部社会調査報告書)
- , 2013「資料: 朝鮮学校への嫌がらせ裁判に対する意見書」『評論・社会科学』同志社大学人文学会, 149-185
- ウリハッキョをつづる会, 2001『朝鮮学校ってどんなところ?』社会評論社
- 小熊英二・姜尚中編著, 2008『在日1世の記憶』集英社新書
- 小熊英二, 2013「点と点をつなぐ」『信濃毎日新聞』2013年10月15日
- 小沢有作, 1973『在日朝鮮人教育論——歴史編』亜紀書房
- 木下昭, 2009『エスニック学生組織に見る「祖国」——フィリピン系アメリカ人のナショナリズムと文化』不二出版
- 金尚均, 2007「民族的尊厳の回復としての朝鮮学校」『法学セミナー』2007年7月
- 金成姫, 2013「1970年代在日同胞母国訪問事業に関する政治社会学的考察」松田素二・鄭根植編『コリアン・ディアスポラと東アジア社会』京都大学出版会
- 金泰泳, 1999『アイデンティティ・ポリティクスを超えて——在日朝鮮人のエスニシティ』世界思想社
- 金漢一, 2005『朝鮮学校の青春——ボクらが暴力的だったわけ』光文社

- 京都大学教育学部比較教育学研究室, 1990『在日韓国・朝鮮人の民族意識——日本の学校に子どもを通わせている父母の調査』明石書店
- 高全恵星監修, 2007(柏崎千賀子訳)『ディアスポラとしてのコリアン——北米・東アジア・中央アジア』新幹社
- 権肅寅, 2007「帰属とアイデンティティの分化と統合」伊藤亜人・韓敬九編著『中心と周縁からみた日韓社会』慶應義塾大学出版会
- 徐京植, 1997『分断を生きる「在日」を超えて』影書房
- 宋基燦, 2012『「語られないもの」としての朝鮮学校——在日民族教育とアイデンティティ・ポリティクス』岩波書店
- 田中宏, 2013『第3版・在日外国人』岩波新書
- , 2013「朝鮮学校の戦後史と高校無償化」『〈教育と社会〉研究』第23号, 一橋大学〈教育と社会〉研究会
- , 2015「高校無償化法における『高等学校の課程に類する課程』に関する意見書」(大阪地方裁判所提出)
- 谷富夫編著, 2000『民族関係の結合と分離』ミネルヴァ書房
- 曹慶鎬, 2011「在日朝鮮人コミュニティにおける朝鮮学校の役割についての考察」『移民政策研究』第4号, 移民政策学会
- 朝鮮高校にも差別なく無償化適用を求めるネットワーク愛知会報『ととり通信』1号～17号
- 朝鮮高校生就学支援金不支給違憲国賠訴訟弁護団, 2015「朝鮮高校生就学支援金不支給違憲国家賠償請求訴訟のご報告」(朝鮮高校にも差別なく無償化適用を求めるネットワーク愛知・2015年総会資料)
- 中島智子編, 1998『多文化教育——多様性のための教育学』明石書店
- , 2011「朝鮮学校保護者の学校選択理由——『安心できる居場所』『当たり前』を求めて」『プール学院大学研究紀要』第51号
- , 2013「朝鮮学校の二つの仕組みと日本社会」『〈教育と社会〉研究』第23号, 一橋大学〈教育と社会〉研究会
- 中村一成, 2014『ルポ京都朝鮮学校襲撃事件〈ヘイトクライム〉に抗して』岩波書店
- 朴三石, 1997『日本の中の朝鮮学校』朝鮮青年社
- , 2011『教育を受ける権利と朝鮮学校——高校無償化問題から見えてきたこと』日本評論社
- 片栄泰, 2006『九州コリアンスクール物語』海鳥社
- 裴明玉, 2013「朝鮮高校生就学支援金不支給違憲国家賠償請求訴訟について」『人権と生活』Vol. 36, 在日本朝鮮人権協会
- 山本かほり, 2013「朝鮮学校における『民族』の形成——A朝鮮中高級学校の参与観察から」『教育福祉論集』第61号, 愛知県立大学教育福祉学部紀要
- , 2014「朝鮮学校のフィールドから」『ソシオロジ』179号, 関西社会学研究会
- , 2014「朝鮮学校で学ぶということ」『移民政策研究』第6号, 移民政策学会
- , 2015「『朝鮮高校無償化裁判』が問うていること」『在日総合誌・抗路』1号, 抗路社
- , 2015「『北朝鮮』バッシングと朝鮮高校」平田雅巳・菊地夏野編『ナゴヤ・ピース・ストーリーズ——ほんとうの平和を地域から』風媒社
- , 2015「質的パネル調査からみる在日朝鮮人の生活史」『社会と調査』No. 15, 社会調査協会
- , 2017「排外主義の中の朝鮮学校——ヘイトスピーチを生み出すものを考える」『移民政策研究』第9号, 移民政策学会
- 李洪章, 2010「朝鮮籍在日朝鮮人青年のナショナル・アイデンティティと連帯戦略」『社会学評論』第61巻第2号
- 和田春樹, 2012『北朝鮮現代史』岩波新書
- Ryang, Sonia, 1997, *North Koreans in Japan: Language, Ideology and Identity*, Boulder, Co: Westview Press
- 〈雑誌より〉
- 岡真理・李英哲「往復書簡」『イオ』2012年1月号～3月号, 朝鮮新報社
- 〈映画〉
- メーテレ制作『ウリナラ内なる祖国 愛知朝鮮中高級学校 寄宿舎の1年』(2005年4月12日放送)
- 金明俊監督『ウリハッキョ』(2005)
- 朴思柔・朴敦史監督『60万回のトライ』(2013)
- 朴英二『蒼のシンフォニー』(2016)